

# 保育所・幼稚園でのプレイセラピーの実践

—— 子育て支援の一方法として ——

久米 禎子

(キーワード：幼児教育施設, プレイセラピー, 子育て支援, 連携)

## 1. はじめに

筆者はここ数年にわたって、臨床心理学の専門家として、地域の保育所や幼稚園などの幼児教育施設において、保護者や保育者が「気になる」子どもに対してプレイセラピーを行ってきた。その実践の背景や成果の一部は中津ら(2012)によって報告されているが、本論文では、筆者自身のプレイセラピストとしての現場での実践を通して見えてきた、幼児教育施設でプレイセラピーを用いて子育て支援を行うことの意味や今後の課題について検討してみたい。

鯨岡(2013)は、いまの保育の現場には、能力面の育ちには問題がなくても、厳しい家庭環境、保護者の生活の乱れ、保護者の過剰な期待、保育のあり方の問題などから、心の育ちに問題を抱えた子どもが大勢おり、周囲の大人への信頼と自分への自己肯定感という、心の中核になるべき心の土台が十分に育っていない子どもが大勢目につくことを指摘している。世代間や地域のつながりが希薄化し、子育てが孤立しがちで、氾濫する情報の中で大人の都合や不安が先に立ち、ともすれば、乳幼児期にもっとも重要な子どもとの情緒的な関わりが後回しにされがちになっている。保護者や保育者ががんばりのみに頼っていたのでは、このような状況を改善していくのは非常に困難である。いま、厚生労働省が主導し、さまざまな地域で取り組まれている子育て支援事業は、保護者、保育者といった当事者だけでなく、周囲の人とともに子育てに参加し、地域で子どもの育ちを支えていこうというものである。

従来の子育て支援は、子育ての直接的な担い手である保護者の不安や悩みに対して、情緒的な支えや相談、情報提供といった形で応え、また保護者同士の交流を促進することによって、よりよい育児環境をつくることを主眼として行われている。臨床心理学の専門家である臨床心理士も、そうした子育て支援に積極的に関わってきた。こうした取り組みは、関係者の地道な努力によって成果を挙げてきており、今後もその重要性はますます高まっていくと思われる。しかしながら、その一方で、どのような事業や取り組みにも言えることであるが、こちらの用意したサービスに乗りにくく、なかなか支援の手が届かない保護者や子どもも依然として存在するのである。それぞれの保護者の抱える問題や置かれている状況はさまざまであるから、支援する側も、それに対応して多様なアプローチや受け皿を工夫していく必要があるのではないだろうか。

本論文で報告する、幼児教育施設におけるプレイセラピーを用いた子育て支援は、そのようなアプローチのひとつである。後に詳述するが、この実践の特色は大きく三つある。一つ目は、関わりの必要な子どもに、直接アプローチできること、二つ目に、保育者との情報交換やコンサルテーションを通じて保育場面での子ども理解が深められ、保育の質の向上が期待できること、三つ目に、既存の支援にはつながりにくい保護者にも関わりの糸口をつくり得ることである。

なお、本論文では臨床心理士とプレイセラピストという用語を併用する。臨床心理士とは、(財)日本臨床心理士資格認定協会によって与えられた資格を持ち、心理学その他の関連領域を基礎学問として心理査定や心理面接等の実践業務を行う専門家である。プレイセラピストとは心理療法のひとつであるプレイセラピーを行う際のセラピストの呼称であるが、多くの場合、臨床心理士という資格をもった専門家である。なお、プレイセラピストは資格名ではない。本論文ではこの二つの用語を用い、文脈によって適宜使い分けることにする。

## 2. プレイセラピーとは

プレイセラピー(遊戯療法)とは、子どもを対象とした心理療法であり、プレイセラピストとの交流や表現の

手段として、言葉だけでなくプレイ（遊び）が用いられる点に特徴がある。言語表現が未熟な子どもが、言葉の代わりに遊びによって自分自身を象徴的に表現することを通じて、治療的な変化が生じるのである。ここで言うプレイとは、単なる遊びではなく、「表現すること」（山中，2006）であり、子どもの遊びを、その子どもの存在をかけた象徴的な表現として理解することが重要である。

プレイセラピーにおいては、その他の心理療法と同様、プレイセラピストとの関係性が基盤となってプロセスが進展する。遊びそのものにも治療的な効果があるが、遊びを通して自分自身を表現し、それがプレイセラピストに受けとめられ、理解されることによって、子どもの自己治癒力が働きはじめる。プレイセラピーの治療的な効果は、子どもの自己治癒力を活性化し、自己成長力を高めることにあるので、いわゆる心理的な問題を抱える子どものみならず、身体的あるいは発達のな問題を持つ子どもも含め、さまざまな問題を持つ子どもに幅広く適用することができる。

プレイセラピストに求められる基本的態度としては、子どもとの間にラポールを築き、子どもが安心して自由に表現できるように関わっていくことなどを述べた、アクスラインの8原則（Axline, 1947）がよく知られている。プレイセラピーは、通常、プレイルームと呼ばれる専用の部屋で、子どもの自己表現がしやすい遊具や粘土などを用意して行われるが、「おもちゃよりもなによりも大切なものは、子どもの心がわかるセラピストの存在である」（東山，2005）と言われるように、子どもの遊びを、受容的な雰囲気の中で意味ある大事な表現として受け取り、その意味を理解しようとするプレイセラピストの存在が不可欠である。またそこに、単なる遊び相手ではない、プレイセラピストの専門性があるのである。

### 3. 幼児教育施設でのプレイセラピーの実際

ここからは、実際に筆者が行ってきた幼児教育施設でのプレイセラピーの実践の概要を示したい。基本的には通常のプレイセラピーの方法に準じているが、幼児教育施設ならではの制約や配慮しなければならない問題もある。

#### (1) セッティング

時間：時間や場所といったプレイセラピーを行うための基本的な枠組みは、保育所や幼稚園など、実践を行う施設との相談により決定している。多くの場合、週に1回、同じ時間、同じ場所で行うことを原則としているが、時間の長さは30分から50分と、施設や対象児によってある程度幅をもって行っている。また、子どもにとって、保育所や幼稚園は生活の場であり、あくまでそちらが主である。プレイセラピーは、子どもの通常の生活に無理のない自然な形で導入することが、子どもにとっても、保育者にとっても重要であると考えている。したがって、なるべく両者に負担や影響の少ない時間帯を選び、また、保育所や幼稚園の行事と重なるときは、そちらを優先してもらっている。プレイセラピーの原則から言えば、セラピーの基本構造が流動的であり、原則から外れるやり方である。そのことにより、セラピーの密度や深さが損なわれていることは否定できない。しかし、子どもの生活の場で行っている以上、ある程度、現実と折り合いをつけながら行うことは避けられないことであり、むしろ、施設や子どもの現実を無視して、原則を押し通すことの方がマイナスが大きいと考える。保育者との信頼関係ができ、プレイセラピーについて理解が得られると、安定した構造でプレイセラピーを行うための協力も得やすくなる。日ごろから保育者との間で率直に話し合える信頼関係を築きながら、できるだけ子どもにとって安定した構造でセラピーが行えるように努力していくことが重要であろう。

場所：施設に、できるだけ他の子どもが入って来にくい静かな部屋を用意していただいている。その施設の空き教室を利用させていただくことが多い。また、プレイセラピーの時間中は他の人が入ってこないようお願いし、対象児が安心して表現できる場を守るようにしている。この点については、保育者の理解と協力が不可欠である。

遊具：その施設のものを使わせていただく場合もあるが、プレイセラピーのために用意されたものではないので、必要なものをこちらが持ち込むことが多い。そのため、通常のプレイルームより遊具の種類や数は限られるが、筆者はそれほど不自由を感じたことはない。子どもはどんなものでも遊び道具にする力を持っており、自分の表現にピッタリなものを見つけ出してくるからである。たとえば、ある子どもは、部屋に付属していた倉庫を生き生きと探検したり、物置にあった本物のマイクで運動会ごっこを展開したり、そこにあるものを見事に活用

した。重要なのは、やはり、そうした子どものイメージーションを受けとめることのできる大人の存在なのだと思うされる。遊具は、ブロック、プラレール、ままごとセット、お絵かき道具など、子どもが遊びを自由に展開できるものを基本に、対象児の年齢や特性も考慮して用意している。

## (2) プレイセラピー

対象児：保護者が希望した、または、保育者が気にかかる子どもで、保護者の了解が得られた子どもを対象としている。プレイセラピー実施前に、筆者とは別のカウンセラーが保護者と面接し、子どもの様子や保護者の思いを聞き取っている。また、保育者から対象児について簡単な説明も受けている。対象児となる子どもはさまざまであるが、保育者が「集団生活になじみにくい」あるいは「発達で気にかかることがある」と捉えている子どもが多い印象である。

導入：プレイセラピーの開始に際しては、保育者から対象児になんらかの説明がなされることが多い。その説明の仕方は保育者によりさまざまである。保育者がプレイセラピーをどのようなものとして理解しているかは子どもに対する説明の仕方に反映されるであろうし、保育者と子どもの関係のあり方は、子どものプレイセラピーに対する安心感にも繋がるであろう。あとでプレイセラピストがプレイセラピーへの導入を行うので、必ずしも保育者からの正確な説明は必要ないが、対象児が悪い意味で自分が特別扱いされていると感じる（たとえば「自分は悪い子だから他の子とは違うことをしなくてはならない」とか、「別室（プレイルーム）へ行っている間に他の子のやっていることから取り残される」といったような思いを抱くなど）ことがないような配慮は必要かと思われる。

対象児とプレイセラピストの出会いの場面において、個々の対象児に応じて導入を行う点は、通常のプレイセラピーと何ら変わるところはない。自分の気持ちをどれだけ分かってくれ、大事にしてくれる人なのか、ということについて、子どもは大人を即座に見抜く力を持っている。場面構成や言葉での説明は必要最小限にとどめ、子どもが、プレイセラピーの場を安心して自分を自由に表現できる場であり、プレイセラピストは自分を守り、理解しようとする存在であることを自然に感じとることのできるような関わりをすることが何よりも重要であろう。

過程：どのような経過をたどるかということも、通常のプレイセラピーと同様、事例によってさまざまである。したがって、その過程は一般化できないが、通常、子どもとプレイセラピストとの関係ができ、子どもが自由に表現をし始めると、日常生活でもさまざまな変化が生じてくる。たとえば、保護者や保育者への甘えの表現、自己主張、興味の広がり、遊びへの集中、他児への興味や関わりの増加、といったことなどである。そうした変化は、その子どもが、自分にとってまだ十分に達成されていない発達の課題に試行錯誤しつつ取り組み、発達のステップを一段階越えていこうとしている動きとして理解することができる。つまり、プレイセラピーにより、子どもの自己成長力が刺激され、生き生きと働き始めているということである。また、つらい体験や、苦手なことなどを、プレイセラピーを通して、能動的に再体験し、より統合された形で自分の中に取り込んでいこうとする子どももいる。子どもはプレイセラピーの場やプレイセラピストをそれぞれのやり方で使い、自分に必要な心の仕事をしていくのである。

終結：プレイセラピーは、子どもがそれを必要としなくなった時点で終結となる。プレイセラピストと過ごすよりも、他の子どもと遊んだり、活動したりすることの方が楽しくなれば、それを終結のサインとみなすことができる。別の言い方をすれば、他の子どもと楽しく遊べる子どもには、プレイセラピーはまず必要ない。だからプレイセラピーとは、遊べない子どもが遊べるようになるためのものであるという言い方も、あながち間違いではないであろう。しかしながら、保育所や幼稚園での実践においては、発達の課題を抱える対象児が多いこともあり、終結の時期がはっきりしないことが多い。継続的、長期的な関わりが必要な場合が多いからである。その場合は、現実的には年度の終わりや対象児の卒園などが終結のタイミングとなる。プレイセラピストの関わりは終了するが、引き続き、対象児や保護者への関わりが発達促進的に十分なされていくよう、引継ぎやリファーマンなどが重要になってくるであろう。

## 【事例】

実践の具体例として、引っ込み思案で言葉の発達も遅いことから対象児となったAちゃん（幼稚園女児）との関わりの概要を以下に示す。

## 第1回

恥ずかしそうに黙っているAちゃんにプレイセラピストは自己紹介し、〈何かしたいことある？〉と尋ねた。するとAちゃんは、「ボールしたい」と言う。〈ボールするの？ どうやってやるの？〉と尋ねると、Aちゃんは部屋の奥に進んで行って、プレイセラピストにボールを渡して投げるように指示する。プレイセラピストが軽くボールを投げてみると、Aちゃんはバウンドしたボールを2、3回目で全身を使ってキャッチ。そして「やった！」と片手を挙げてガッツポーズ。プレイセラピストも〈やった！〉とガッツポーズする。

[Aちゃんとプレイセラピストとの出会いの場面である。事前に、引っ込み思案でおとなしく、自分から表現することの少ない子どもだと聞いていたが、自分の意思が尊重され、自由にあつても安心な場面であることを即座に感じとったAちゃんは、すぐに積極的にふるまい、自分を表現し始めた。この回の後、甘えや反抗がはじめて母親に対して出始めたことが報告された。]

この後、Aちゃんとは週1回のペースでプレイセラピーを行い、そのなかでAちゃんは自分のストーリーを豊かに展開し、また、いろいろなことに挑戦するなかで自信や自己コントロールの力をつけていった。一方、日常場面でも、保護者や保育者に甘えや不満などの感情を表現するようになり、言葉も増え、積極性も発揮されるようになっていった。そして数か月後、Aちゃんの卒園を機にプレイセラピーは終了することとなった。

## 11回目（最終回）

卒園を控えた時期。「Aは1年生になるんや」と言う。プレイセラピストにだっこをさせて高いところにあがる。「はなさんとってよ」と言い、プレイセラピストはAちゃんが落ちないようにしっかりと支える。しかししばらくするとAちゃんは「手をはなして」と言う。プレイセラピストがそっと手を離すと、Aちゃんはすくくと自分の足で立つ。誇らしげな様子。

[Aちゃん自身の潜在的な力もあり、比較的短期間で変化が見られた事例である。Aちゃんはプレイセラピストとの間で、これまで十分にできていなかった、他者に感情を表現し、受け止めてもらうことや、自分の感覚を味わい、主体的に動くことを、さまざまな形で体験していった。それがAちゃんの成長につながったと思われる。そして最終回、自分の成長を自ら確認し、プレイセラピストとの別れを乗り越えていったのである。]

## (3) 保育者との情報交換・コンサルテーション

幼児教育施設でのプレイセラピーでは、来所型のセラピーとは異なり、保護者と日常的に直接関わるのが難しいことが多いため、情報交換は主に保育者との間で行うことになる。対象児の日常の様子を知り、セラピーの過程を検討するためにも、保育者との情報交換は非常に重要である。セラピーの過程と日常生活は密接に関わっているからである。また、(2)で挙げた、子どもの日常生活での変化、例えば、保護者や保育者への甘えの表現、自己主張などは、時に、保護者や保育者にとって、「赤ちゃんがえりした」「困ったことだ」「手がかかるようになった」などとマイナスに受け取られる場合があり、そうになると、せっかくの子どもの成長に向けての動きがすんなりと運ばないことになりかねない。子どもの発達の課題は何か、それが現在どのように進んでいるところなのか、といった理解を保育者との間で共有していくことは、子どもの発達のプロセスをよりスムーズなものにしていく手助けになる。それだけでなく、保育者が子どもを適切に理解することは、子どもの生活の大きな部分を占める保育所や幼稚園の生活の質に関わってくることでもある。プレイセラピーの場合は、子どもにとって非日常的な時空間であり、それゆえにこそ、自由な内界の表現が可能になる。しかしこのことは、プレイセラピーの場が日常から遊離したものであることを意味しているわけではない。むしろ、日常の生活と適切につながり、子どもの内界と外界の両面にしっかり目配りができてこそ、セラピーの非日常性が生きてくるのである。プレイセラピーを有効に進めていくためにも、また、情報交換を有益なものにするためにも、保育者との間に信頼関係を築き、率直に話し合っていけることが重要である。

#### (4) 保護者へのカウンセリング

子どもは生活の大半を家庭で過ごしている。また子どもにとって、保護者との関係は、他者との関係の基礎ともなる。家庭のあり方が子どもに及ぼす影響の大きさは計り知れない。子どもにプレイセラピーを行う際にも、保護者とどのような関わりを持つかによって、その進み方は大きく影響される。できれば定期的、継続的に保護者と面接の機会を持ち、保護者の思いに耳を傾けたり、子どもについて話したりできることが望ましいが、現実には難しいことが多いであろう。時間の確保という物理的な問題もあるし、そもそも、保護者がそうした面接を（少なくとも表面的には）求めていることもある。また、プレイセラピストはあくまで子どものセラピストであり、秘密保持の問題や、面接の密度が薄まる、どちらかの立場に立ちにくくなるなどといった点で、同一セラピストが子どもと保護者の両方に会うことのデメリットもある。しかし、プレイセラピストが担当するにせよ、別のセラピストが担当するにせよ、保護者との関わりを積極的に持っていくことが望ましいことは間違いない。子育てに不安を抱えていても誰に相談すればよいかわからなかったり、自分の子育てを責められることを恐れて相談できなかつたりする保護者は多い。そのような保護者が、安心して自分の悩みや迷いを話すことができ、一緒に考えてもらえる場合は、いま、とても求められているのではないだろうか。そして、保護者のカウンセリングと一緒にすることでプレイセラピーの効果もさらに高まるであろう。

### 4. 幼児教育施設でプレイセラピーを実践する意義

ここまで述べてきたことをふまえて、幼児教育施設でプレイセラピーを実践する意義を3点に分けて述べてみたい。

#### (1) 子どもへの直接的な関わり

どんな子どもも、自分自身のなかに、よりよい自分に成長していこうとする意志と力を持っている。しかし、環境や周囲の人との関係のなかで、その意志と力が十分に発揮できないことがある。そのような場合に、子どもは、大人から見れば「扱いにくい」「困った子だ」と思われるような形で、自分の困り感や不全感を表現することが多い。しかし、このような子どものサインは、必ずしも適切に受け止めてもらえるとは限らず、むしろ「困った子」「やっかいな子」とみなされ、ますます生きにくい状況に陥ることになりかねない。プレイセラピストはまず、そのような子どものサインを受け止め、子どもが本来の力を発揮できるように安全で自由な場を提供するのである。それと同時に、プレイセラピーの場で活性化された子どもの力が日常の場でも伸ばしていけるように、子どもの行動の意味や気持ちが分からずに困っている周囲の大人の気持ちにも配慮しながら、環境面の調整も行っていく。一般的に、関わりの方が早ければ早いほど子どもの可塑性も大きく、問題自体もまだそれほどこじれていないことが多い。そういう意味でも、保育所や幼稚園の時期に適切な関わりを持つことは有意義である。

また、通常の来所型の相談では、保護者または保育者に、子どもを連れて相談施設に出向いてもらう必要がある。一回だけでなく、その後も継続的に通ってもらうことも多い。これは、相談者にとっては時間的にも経済的にも、また労力的にも負担となるが、相談施設が距離的に離れていることが非日常的体験となったり、動機づけを高めたりすることや、子どもが保護者を独占できる時間となるなどといった点で、来所してもらうこと自体に治療効果を高める働きがある。したがって、安易に相談者の負担を減らせばよいというものではない。しかしながら、さまざまな問題や困り感を抱えながらも、時間的・経済的な余裕のなさや、相談機関に対する抵抗などから、来所になかなかつながらないケースが少なからずあることも事実である。そうしたケースには、支援の手が届きにくく、問題がそのまま放置されてしまう。そのようなケースに対して、まずは子どもと直接関わりを持つことができる点で、幼児教育施設でプレイセラピーを行うことは有効である。そこから、保護者への関わりへの糸口を探っていくことが次の課題となる。プレイセラピーを単独で行うよりも、保護者や保育者との関わりも同時に行うことの方が、より効果的である。

#### (2) 保育者との連携

近年、保育現場において保育者が「気になる」子どもは増加していると言われるが、「気になる」中身はさまざまであり、また、その子どもを「気になる」と捉える保育者と子どもとの関係がどのようなものであるのかも、当然、考慮すべき問題である。子どもは年齢が幼ければ幼いほど、周囲の環境の影響を大きく受けるので、何か

気になったり、困った問題があったりするとき、それをその子どもに固有の問題であると即断しないことが大切である。子どもに固有の問題であると決めつけてしまうと、子どもに対するまなざしが否定的になり、関係がますます硬直化し、問題が固定化しがちだからである。しかし、保育者は日々子どもと接しているため、自分が見ている子どもの姿が子どものすべてだと捉えがちである。少し距離を置いて全体の状況を眺め、そこから客観的に子どもを見るということがどうしても難しくなる。そのような点において、プレイセラピストは外部者であるからこそ、状況を全体的に把握し、さまざまな場面での子どもの様子を総合して、子どもの状態および子どもをとりまく周囲の状況を捉えることができる利点がある。

また、鯨岡（2013）が指摘するように、いまの保育の現場では目に見える行動だけを問題にしようとする行動中心主義が非常に力を持っている。そうした流れの中で、心の育ちの重要性に改めて注目していく必要があると思われる。その際、心の専門家である臨床心理士は、心をどのように捉えていくのか、どのように関わっていくのかということについて、実践をふまえて、現場に即した形で寄与していくことができるのではないだろうか。心の育ちの面を大事にして子どもの発達的な課題を捉え、その理解を保育者との間で共有していくことは、プレイセラピーを円滑に進めていくために必要であるのみならず、保育の質を高めるという点で、子どもの発達を側面的に支援していくことにもなると思われる。

### (3) 保護者と支援をつなげる糸口

(1)でも触れたが、潜在的なニーズはありながらも、相談機関やサービスにつながりにくい保護者に対して、子どもに対するプレイセラピーをきっかけに、必要な支援につなげていくことができる可能性がある。

たとえば、筆者の経験では、保育所や幼稚園でプレイセラピーを開始してしばらくすると、保育者から「保護者の様子が最近変わってきた」と報告を受けることがたびたびある。具体的には、子どもの送り迎えの時の会話が増えた、表情や態度が柔らかくなった、といったようなことである。これらが、日ごろの保育者の、保護者に対する心配りや関わりの努力の成果であることは言うまでもない。しかし、それに加えて、プレイセラピー開始時に保護者との間でもっている面接の時間が、保護者にとって、自分の思いを語り、抱えてもらう経験になっているのかもしれない。また、プレイセラピーにより子どもが変化し、その変化を保護者が肯定的に受け止めているということもあるのかもしれない。あるいは、保育者とプレイセラピストとの情報交換の中で、ともすれば否定的に見られがちな保護者の行動の意味を、保護者の側から一緒に見てみることによって、どんな行動にも保護者なりの意味があることや、そういう行動をとらざるを得ない保護者の事情があることがある程度理解され、保護者に対する保育者の見方や関わり方が多少なりとも変わるといえるかもしれない。

おそらく、こうした変化というのは単一の原因によって生じているのではなく、いろいろな要因が複合的に組み合わさって生じるものであろう。ともかく、保護者と保育者の関係が良好になることは、保護者の保育者に対する信頼感が高まるということであり、その信頼関係に支えられて、保育者が勧める外部の支援につながる可能性を高める。何より、保護者によっては、他者に心を開いたり、頼ったりする経験が乏しく、保育者に心を開くことが他者とつながる初めてと言ってよいような体験になることもあるのである。保護者の心が他者によって支えられ、いくぶんなりとも安定することは、子どもの情緒の安定にもつながる。

一人の人の力では子どもの成長を支えることはできない。いろいろな人が子どもに関わり、また互いを支え合い、そうした力が幾重にも重なって、一人の子どもの成長が支えられ、促進されていくのであろう。事態が困難なとき、それに関わる人々が余裕をなくして互いを責めあったり、関わりを拒否してしまったりすることがよく起こる。そのような時に、当事者それぞれの思いを聴き、当事者同士の関係の風通しを良くすることも、臨床心理士に期待される役割のひとつであろう。一般に、ふだんからよく接して知り合っている方が話しやすいと思われるがちであるが、ふだんの関係がないからこそ、かえって話せることもある。そういう意味でも、外部性を持った専門家が保育現場に入る意義は大きいと言える。プレイセラピストが保育の現場に参加することで、子どもの成長を支える人の輪がより有効に機能することが期待できるのではないだろうか。

## 5. 今後の課題

これまで述べてきたように、幼児教育施設でプレイセラピーを通して子育て支援を行う意義は大きく、実際、筆者の実践においても一定の成果と手ごたえを感じている。子育て支援の一手段として、もっと広く保育現場に取り入れられてもよいのではないかと思われる。しかし、そのためには克服しなければならない課題が多くある。

たとえば、筆者が現在行っている実践は、ボランティアとして行われている。そのため、十分な人員が確保できず、保護者へのアプローチもまだ不十分である。また、施設側との個人的な関係に依存しているため、継続的に行っていく見通しが立ちにくく、活動を広げていくことも難しい。実践をプロジェクトとして組織化していくことや、保護者へのアプローチを充実させていくことなどが、今後の大きな課題である。

## 文 献

Axline, V.M.: Play Therapy, Houghton Mifflin Co., Boston, 1947. (小林治夫訳：遊戯療法, 岩崎学術出版社, 1972.)

東山紘久：遊戯療法, 2005. (乾吉佑他編：心理療法ハンドブック, 創元社, p99-105.)

鯨岡峻：子どもの心の育ちをエピソードで描く, ミネルヴァ書房, 2013.

中津郁子・久米禎子・粟飯原良造・井上和臣・葛西真記子・吉井健治・今田雄三・曾川京子・小倉正義・末内佳代：幼稚園でのプレイセラピーの実践研究－幼児の「育つ力」と子育て支援としての効果－, 鳴門教育大学研究紀要, 第27巻, 45-53, 2012.

山中康裕：心理臨床学のコア, 京都大学学術出版会, 2006.

# **Practice of the play therapy in kindergarten : a method for childcare support**

KUME Teiko

In this paper, I reported practice of the play therapy in preschool education facilities and examined the significance and problems of it. The significance of this practice is as follows. The first is that psychotherapist can approach children who need psychological support directly. The second is that it can be expected to improve the quality of the childcare through sharing of information and the consultation with nursery teachers. The third is that it can become a chance to approach parents who are hesitant to receive childcare services. Some issues remain to be solved. We need to organize this practice as a project and to enhance the support function for parents.